

知覚相対主義の批判

——「知覚の哲学」試論 その五——

種村 完司

(1990年10月12日受理)

Kritik des Relativismus der Wahrnehmung

——Versuch über “die Philosophie der Wahrnehmung” V——

Kanji TANEMURA

I. 知覚にたいする信と不信

1) われわれは、日常生活の中で、じつにしばしば見まちがえたり、聞きちがえたりしている。「見まちがい」「聞きちがい」といっても、「見え」「聞え」という知覚的事実そのものが誤っているというよりは、いわば不明瞭な知覚を通して、対象（の形状・性質その他）について誤って判断したのだ、ということの前論で明らかにした。しかし、判断と直結しているような知覚の場合、その知覚をつうじておこなわれる、対象についての誤った判断は、誤った知覚的判断、ひいては誤った知覚と同等であるとも述べた。このかぎりでは、われわれはやはり、いわゆる対象的判断の誤りに導きやすい、あいまいな知覚や誤った知覚が存在することを承認せざるをえない。

こうしたことが、いうまでもなく哲学史上、感覚・知覚は、われわれをしばしば欺くもの、十分な信頼のおけないもの、さらに哲学の確実な基礎たりえないもの、という評価の源泉となってきた。だが、人間の対象認識は、感覚・知覚にとどまるものではないにせよ、感覚・知覚なしには成立しえないし、開始もできない。ヘーゲルのように、感覚・知覚の可変性、一時性、誤りやすさ等を強調することによって、認識をもっぱら知性による感性的諸素材・諸契機の止揚（むしろ廃棄）¹⁾の過程ととらえることは、知性信仰にもとづく節度のない思弁主義を招来するだけであろう。その過ちをおかさなためにも、われわれは、あらためて、感性的知覚がそもそもどれほど信頼されうるものか、逆にどの点からは信頼してはならないか、つまり知覚にたいする信と不信の境界ともいべきものを確定しなければならない。

1) ヘーゲルのいう「止揚」は、よく知られている通り、「廃棄」と「保存」という矛盾する両概念をふくんでいる。しかし、フォイエルバッハがヘーゲルによる感性軽視を批判したように、知性による感性的なもの止揚過程には、後者の「保存」的性格が十分に貫かれてはいなかった。

その点で、感覚・知覚にたいしてとったデカルトの態度は、適切な知覚評価をめざす上で、一つの参考になるように思われる。哲学の確実な第一原理をうちたてる途上で、デカルトのおこなう方法的懷疑は、臆見や先入見、事象における不確かなもの・誤りやすいものを、次々に排除した。この次元では、感覚・知覚は、疑わしいという評価を免れないものとして、批判と排除の対象でしかなかったことはいうまでもない。だが、日常的な対象認識のレベルでは、彼は、感性的知覚がもつ一定の確実性および知覚を信頼すべき根拠を、強調することも忘れなかった。物体の本質については、感性的知覚による認識は、なるほどきわめて不十分だが、「身体の保全に関する事がら」については、それは虚偽よりも真実を多く示してくれるし、他の多くの感覚、記憶や悟性などをいっしょに用いることによって、吟味を重ねながら正しい対象知覚をすすめることができる、ということ述べた（『省察』）。

方法的懷疑によっていっさいの感覚・知覚とその成果を排除したこと（さらには、哲学原理の探究と日常的な対象認識とを切断したこと）が、正しいことかどうかは疑問だが、合理論者デカルトにおいても、知覚への信頼（条件づきの）があったことは注目されてよい。「感覚から得てくると思われるものは、何もかも軽々しく容認すべきではないことはもちろんであるが、しかしまた、そのすべてに疑いをかけるべきでもない」（『省察』）という彼の主張は、ある意味できわめて常識的ではある。しかし、それは、イギリス経験論や現代現象主義派による知覚信仰と、それと対極的なドイツ観念論の知覚不信のいずれにも与せず、さらに両者の積極面を摂取できる足場を、われわれに提供してくれていることもまちがいない。

2) さて、ここで、知覚への不信や懷疑をひきおこす原因になってきた、そして現になっている、種々の知覚の誤りやすさについて、いくつかの例をひきながら吟味してみよう。

「知覚の誤り」とはといっても、きわめて単純なものから、かなり複雑なもの・いわば高次なものにいたるまで、いろいろな種類、いろいろな段階がある。

たとえば、遠くからは円柱状に見える四角の建物、生きた人間だと見えるマネキン人形、赤ん坊の泣き声のようにきこえた猫の声など、これらの視覚や聴覚の誤りは、日常生活の中でも単純な見まちがい・聞きちがいの部類に属する。これらの誤りを訂正するのに、それほど苦労はいらない。事物により近づいたり、その周りを回って、あらためて見つめてみる、あるいは注意力をはたらかせて、一度といわずくり返し、見なおしたり聞きなおしたりする、必要とあれば手でさわったり、叩いたりしてみる、等々。こうした再吟味の行為および他の諸知覚の動員によって、最初の誤りの大部分は訂正されうるだろう。

つぎに、他の諸知覚の助けだけでなく、一定の表象（またはイメージ）や記憶の力によって訂正されうる知覚の誤りも多く存在している。たとえば、たまたま知人に出会ったとき、若いはずの彼が、疲労の表情や服装のせいで老人のように見える場合、以前食べたことのあるカニをエビの味と誤る場合、聴いたことのあるメロディーを別のメロディーととり違える場合など。

これらの諸例も、ごくありふれた日常的知覚の誤りにはちがいない。じっさい、先の例と同じように、いくどか見なおしたり味わいなおしたり聴きなおしたりすることによって、その多くは訂正されよう。しかし、ここでは、知覚のくり返しだけでなく、感性的表象を再生したり、記憶を想起することによってはじめて、誤りに気づき、それを訂正し、正確な知覚的事実に達することも少なくない。過去経験（人間や事物についての、色・音・味についての）が、表象としてまたは記憶像として観念的に蓄積されているからこそ、必要なときに呼び出され、知覚にもとづく対象的判断の誤り訂正の作業に参加してくれるわけだ。

以上のほかに、単純な誤りとはいえぬ、したがって諸知覚の再動員や知性の助力によってもなかなか訂正することが難しい、やや複雑な「誤った知覚」の例もあることに注意しておこう。その代表的なものは、なんといっても、これまで知覚心理学がさまざまな観察と実験の労苦をへて明らかにしてきた「錯覚」の事実である。

視覚の領域では、フレーザー図形に代表される「角度・方向錯視」、ヘリング図形が示す「湾曲錯視」、有名なミュラー・リヤー図形に代表される「大きさの錯視」、ジャストロー図形やポンゾ図形が示す「対比錯視」などの幾何学的錯視現象にはじまり、「あいまい図形や逆理図形による錯視」、仮現運動に代表されるように、静止しているものが動いて見えたり、また逆に動いているものが静止して見えたりする「運動の錯覚」、地平線に近いときの月や太陽は天空にあるときより大きく見えるという「月の錯視」等々、じつに多数にのぼっている。さらに触覚の領域では、交差させた人さし指と中指の間にはさんだ細い棒が二本に感じられる、という「アリストテレスの錯覚」や、同じ重さでありながら、体積の大きいものが小さいものより重く感じられる「運動感覚上の錯覚」¹⁾ などがある。

これら錯覚は、けっして異常な知覚ではないのだが、より高い注意力やなんらかの継続的な知的努力をもってしても、容易に消すことのできない知覚現象なのである。すなわち、人間は、その状況下でどうしてもそう見てしまう、あるいはそれ以外には感じられようがないのであり、その意味で、人間の知覚能力や身体感覚に固有の、いわば内在的な特質の発現にほかならない。

もちろん、錯覚は無条件でおきるわけではない。それは、錯覚をおこしやすい特定の条件にかならず伴われている。もし知覚対象が、変化なき均一的な空間や時間の中におかれているものであれば、あるいは多様な等質的な対象的世界にとり囲まれているのであれば、錯覚はそもそも存立不可能であろう。錯覚が発生するということは、じつは知覚対象が固有の背景をもっているということ、換言すれば、多様な、ときには錯綜した関係の中におかれているということの意味している。しかもその背景は、密度の差や歪み・ねじれ・色彩や明度の違いをもっている、つまりけっして平板で等質的ではない、ということだ。

この複雑な錯覚現象、とくにさまざまな錯視の事実を統一的に説明することはひじょうに難しい。

1) 自動車を運転した者ならよく経験することだが、高速自動車道路での高速度運転に慣れたドライバーは、一般道路に出たとたん、いつもより速いスピードを出しているにもかかわらず、ひどく遅いスピードで走っているとしか感じられない。この例なども、急激な速度変化にもとづく、身体感覚上の錯覚と呼んでよい。

あるゲシュタルト心理学者は、過去経験による説明をしりぞけて、錯視現象を恒常性現象とともに、「場の体制化」の表現だとみなしている（P・ギョーム『ゲシュタルト心理学』）。また、ある論者は、ポンゾ型錯視では、不等な背景におかれた二つの同等の近接刺激が、不等な遠隔対象として知覚され、大きさの恒常性では、不等な背景におかれた二つの不等な近接刺激が、同等な対象として知覚されることを指摘し、錯覚と恒常性の現象は、一般に同じ事態の二側面だと論じている（木曾好能「知覚的世界」、『科学の哲学』所収）。

しかし、幾何学的錯視といえども、きわめて多種多様な原因によって規定されており、ゲシュタルト心理学のいう「体制化」理論だけでは説明されえないと思われる（「体制化」は主要な、だが一つの原因であろう）。また、錯視と恒常性とは、一定の場合に密接な対応関係にあるとしても（遠近法的観点から、ポンゾ型錯視やミュラー・リヤー錯視と、大きさの恒常性とは、一種の相関関係にあることが説明されうる）、これ以外の錯視と恒常性現象とがすべて厳密に対応しうる、ないしは同じ事態の二面だ、とは断言できない¹⁾（そう断言するには、実証的事例があまりに不足している）。

それはともかく、他の知覚によっても、記憶や知性によってもたやすく消しえない錯覚ではあるが、この錯覚のおこりうる条件を知り、その錯覚の特性をあらかじめ理解しておくことは、それを完全に正すことはできなくとも、それによって行動を大きく妨げられたり、危険な状況下に直面せざるをえなくなることを、少なくとも軽減してはくれるだろう。とくに、行為主体がこの錯覚現象のただ中にあるとき、錯覚している身体を反省的な知性によってたえず部分的に修正し、補完し、方向づけようとすることは、合目的的行為の達成にとって欠かすことができない（前ページ注¹⁾の自動車の運転の例を想起せよ）。錯覚そのものの解消や直接的な是正は、たしかにほとんど不可能ではある。だが、われわれは、人間的諸能力を動員し巧みに活用することによって、錯覚をいわば間接的に訂正する、ということはできるのである。

3) つぎに、それ自身誤った知覚というのではないが、誤った判断をひきおこしやすい知覚の例をとりあげて検討してみよう。先にとりあげた、半分水中にある棒が折れて見える、という知覚はその代表的なものだ。それ以外に、デカルト以降よく引き合いに出されてきた、ある物体が白く見える、あるいは熱く感じられる（だから物体の中に白いものがある、あるいは熱いものがある、と判断してしまいやすい）とか、遠くにある物体は小さく見える（だからその物体は目に見える通りの大きさや形である、という判断をくだしやすい）という知覚（それに結びついた判断）などがそれに当たる。

どんな感性的知覚でも、ある条件下での知覚する主体と知覚される対象との交流の結果であり、関係の表現である。だから、感覚・知覚の事実をただちに事物の性状そのもの・本性そのもの（それは知覚の一つの構成要件である）だけに帰属させることは、独断的な誤謬にほかならない。これ

1) この点で、私は木曾論文には部分的に異議があるが、しかし、この論文が主題的に展開している知覚の直接性や確実性についての基本主張には、全面的に賛成である。

がまた、いわゆる素朴実在論のおかしき過ちでもあった。

「白さ」といい「熱さ」といい、ある生理的状态のもとに、対象を白いと見たり、熱く感じたりする主体がなければならず、そして、色や寒熱の物質的条件である光や大気やエネルギーがなければならぬ。だから、色や熱さの知覚も、対象の本来的な性状だけで一義的に決定されるものではない。物体の大きさや形の知覚は、「第一次性質」の名のもとにロックが考える通り、事物自体の性状を、いわゆる第二次性質よりは比較的あるがままに表示するとはいえ、物体自身がさまざまな空間的配置の中におかれうるものであり、それゆえ知覚主体にたいしても変化に富んだ距離・奥行関係を取りうるのである。それゆえ、物体の大きさや形の「見え」は、じっさいの大きさや形と区別されねばならない。「見え」を「対象自体」と同一視するところに、素朴実在論的誤謬が成立するのだが、もし知覚を成り立たせるさまざまな条件を無視したり忘れたりすると、われわれ自身もただちに素朴実在論に類する主観的判断におちこむことになるだろう。

これと同じことは、いわゆる「仮象」（正確には、カントのいう先験的仮象ではなく経験的仮象）についてもいえる。カント自身は、「感官あるいは一般に主観にたいする関係によってのみ対象に属するにすぎないものを客観自体に付加する」ことを仮象と呼び、仮象の例として、バラそのものに赤色を、土星に柄を、あらゆる外界の対象に拡りそのものを付加する場合等をあげている（『純粹理性批判』）。カントの「仮象」規定を受けいければ、前述した素朴実在論的な対象認識も、この仮象の範囲に当然ふくめてよいことになるだろう。

われわれは、このほかに、人間の身体の領域での仮象として、事故で腕か脚を失った人が、今ももう存在しないその四肢の一部のある箇所、以前と同じような痛みを感じるといふ「幻影肢」現象、天文の領域での仮象として、太陽が東から昇り西に沈み、夜空の星も東から西へ回転しているように見える、という天体運動の知覚をつうじて、天空が地球を中心にして回っていると誤解した「天動説」、さらに、社会事象の分野での仮象として、マルクスが明らかにしたように、価値創造の主体は労働する人間であるのに、商品生産のもとでは、人間の社会的労働の産物である商品・貨幣・資本が、それ自体で固有の価値をもち人間から独立しているかのように現象する「商品の物神性」、等々を代表的なものとしてあげることができる。

これらの事象はそれぞれ、それ相当の独自の生理的・心理的・自然的・物理的・社会的・文化的条件、あるいはそれら諸条件の複合に支えられて発生しており、それだけに知覚的レベルだけでは容易に克服しがたい、十分な存在理由をもった仮象である。これらの事実の発生根拠は、知覚をよく洞察するところではない。知性による長い探究とすぐれた発見をまたねばならぬ。さまざまな自然科学や社会科学による研究とその成果は、先の素朴実在論的知識や多くの仮象を成立させる原因や条件を実証的に明らかにし、ひるがえってそれらの発生・必然性を理論的に説明してきた。もちろん、このことによって仮象それ自身が消え去るわけではない。だが、仮象にまどわされずに、より包括的なより巨視的な立場から、自然認識や社会認識をすすめることは可能となる。

要するに、多くの人々をしばしば思いこみや偏見に誘う、仮象などの知覚的事実も、相対的に正

しく現実の事象を反映している別種の知覚や、錯綜した諸現象から恒常的なもの・法則的なものを取りだそうとつとめる知性によって、やはり間接的に訂正されうるのだ、といってよい。厳密に言えば、知覚そのものが直接的に変更させられるわけではないが、知覚から独断的な思いこみや素朴実在論的な偏見へいたる道が阻止されるのである。

人間の知覚が、多くの場合、それ自身錯覚であったり、実在しないものを確信させたり、仮象に導いたりするという理由で、全面的にとはいわないまでも基本的には信頼できない、と主張するのは、当の知覚の不十分さや限界を、他の多くの知覚や思考する知性によって気づかせ、しかもそれを漸次的かつ継続的に克服していくことができる、ということを見ないからである。知覚的事実にはたしかに慎重でなければならない。しかし、それは、知覚への不信とは根本的に異なるのである。

Ⅱ. 知覚的認識の発展

1) 前後左右、そして上下のさまざまな方向と角度から見られた特定の事物のさまざまな側面、いろいろな時と所で状況に応じて変化する人間のいろいろな表情、そのどれをとっても、一つひとつがまぎれもない事実、たしかな知覚的事実である。上面から見れば長方形である机は、横の斜め上から見れば菱形になったり、正面の斜め上からは台形に見えたりするが、知覚的事実という点で、長方形は菱形や台形より優越しているわけではない。明証的な「事実」として同格であり、等価値である。ある人間が、苦勞の多い仕事をやっとなしとげたときに見せる安堵と喜びの表情、愛する肉親の不慮の死に直面したときの絶望的な悲しみと苦痛の表情、親しい人と歓談しながら時おり見せる快活で茶目っ気にあふれた表情など、そのどれもが当の人間自身の性格・気質・感情の現われであり、ある表情だけが他の表情よりいっそう真実だ、というわけではない。ここでも、種々の表情の間になんらかの格差や序列をもちこむことはできない。

以上のことは、だれも否定しえぬほど明白なことのようと思われる。だが、このことをもって、すべての知覚的事実は、どんな条件下でも、その真実性において上下・優劣はない、つまり同格である、と結論づけることが許されるだろうか。じっさい、知覚相対主義に立つ論者は、先の諸例から、机についての「見え」すべてを等価値とした上で、机は長方形であるか、菱形であるか、台形であるか、そのいずれか一つに決定することはできない、という。また、人間の表情についてもすべてが真実であって、どの表情が他の表情より当人の人柄をもっとよく示す表情であるかは決定しえぬ、と断言する。¹⁾ だが、これは、あきらかに飛躍である。議論の本位、対象認識の視点を度外視した独断にほかならない、と私は考える。

ごく常識的に考えれば、一般にひとは、上面から長方形に見える机が、斜め上からは菱形や台形に見えようと、「その机のほんとうの形は長方形だ」と断定するだろうし、机の形は決定できぬと

1) 人間の表情をめぐるこの議論については、大森莊蔵著『流れとよどみ』中の「真実の百面相」を参照。

というような優柔不断な説を一笑に付すにちがいない。そしてまた、こういう常識的で健全な態度にたいして、菱形や台形などの他の存在を無視していると言って、反対する者もほとんどいまい。人の表情についても同様だ。ある人の顔にさまざまな喜怒哀楽の相貌が現われようと、その人の性格や気質をよく知っている人であれば、特別な事態に直面したとき以外の当人の平生の表情にもっとも信をおき、たとえば、「あの人はおだやかでまじめな表情をしている」とか、「陰気で疑ぐり深い表情をしている」というだろう。

それはどうしてか。ある対象について、さまざまな条件下でさまざまな「見え」や「現われ」がありうるとしても、その対象には「見え」や「現われ」に解消できない固有の性状、絶対的とはいわれないまでも相対的に恒常的な本性がそなわっていることを、われわれはふつうの経験を通して知っているからだ。しかも、人間の知覚は、一つひとつの「見え」「聞え」「味わい」のそれぞれを、対象についての孤立したまったく均等な知覚的事実として放っておくのではなく、それらの事実の中でどれがもっとも対象の恒常的な性状や本性をよく表わしているかをも、われわれに教えてくれるからだ。長方形、菱形、台形、正方形等々の「見え」の中で、長方形こそが机の恒常的な形にふさわしいと把握するのは知覚であり、菱形をはじめとする他の種々の形が、その長方形を種々の角度・視点から見る結果生じたものだ、と認知するのも知覚である。

人間の表情（相対的に恒常的な）をつかむのは、机の形を識別することよりずっと難しいが、それでも、陰気で気むずかしい人が、たまたま予期せぬ幸運にめぐりあって、ふだんはめったに見せることのない明るい喜びの表情を現わしたとしても、ひとは、それが特殊な条件下でのみおこったことだとみなして、当人の平生の表情までもがそれで根本的に変化してしまったとは考えないだろう。陰気で気むずかしい表情も、明るい喜びの表情も、恒常的か一時的かは別にして、なるほどその人の性格や気質を表わした、まぎれもないその人の表情ではある。ここに差はない。だが、「では、その人のほんとうの¹⁾表情はどんなものだろう？」という次の問いが発せられるや、種々の表情は、均一・平等の状態にとどまっているわけにはいなくなる。すなわち、知覚的事実を一つひとつ「……である」と確認してすますだけでなく、さらにすすんで、その知覚を通して対象そのものに関するより深い知を獲得しようとするやいなや、諸事実は、単なる平板な流れの連続ではなく、ただちに一種の階層性を帯びてくる。

対象の性状や本性をより直接的に明瞭に示している（すなわち反映している）知覚現象もあれば、間接的にあいまいに表現している現象、さらには先に錯覚や仮象などで見たように、それらを歪めたり顛倒させたりして自らを示している現象もある。くり返すならば、これらの現象は、事実としては同等・等価値である。だが、対象認識のプロセスでは、もはや等しくはない。対象の本性に肉薄しようとする態度には、すでに、その本性への遠近にもとづいて、知覚現象を選択し階層的に整

1) 「ほんとうの」という言葉には、「ふだんの、恒常的な、その人の性格をもっともよく示している」という内容が含意されている。もちろん、「ほんとうの表情」なるものが、一つや二つの表情に限られるとはいえないだろう。ことに喜怒哀楽のはげしい人は、多くのほんとうの表情をもちうる、といってさしつかえない。

序せんとする認知的な努力が生まれている。対象を認識するとは、ある意味で、知覚的事実の中に格差をもちこみ、一種の価値づけをすることなのである。

対象をより深く理解しようとするとき、対象についての諸知覚は端的に同格ではない、ということとは、以前ふれたことのある「注意」の作用を改めてとりあげてみれば、いっそうはっきりするだろう。少し遠くに寝そべっている動物が、瞬間的な知覚では、猫か小犬かをとらえられないが、もう一度よく注意して見つめなおしてみると、それが猫だと理解できる場合がある。形・大きさ・色・動きなどに関して、最初の知覚と第二の知覚とは、明晰さ・鮮やかさにおいて著しい違いが生まれている。後者の明瞭な知覚は、前者のあいまいな知覚よりすすんだ対象の認知なのであり、認識のプロセスにあっては前者より優越している、といってよい。知覚相対主義者のように、知覚をすべて同列におき、そこにいっさい高低・優劣をみとめないとすれば、われわれは、いったい何のために知覚するのか、何のためにより深いより正確な知覚をめざそうとするのか、まったく理解できなくなろう。知覚のはたらきや成果を、認識の発展過程の中に位置づけないと、いわば悪平等にもとづく「知覚現象のアナーキズム」しか成立しないことになる。

注意についていえることは、また知性や経験に浸透され支えられた知覚についても当てはまる。たとえば、ルソーがあげているように、熱くほてった手や冷たくかじかんだ手をぬるま湯の中に入れると、一方は冷たく、他方は熱く感じる。夜、動いている雲の背後に月を見たとき、静止しているはずの月は反対方向に動いているように見える。こうした現象をはじめて経験する場合と、いっくどか同じ経験をへたあとで改めて知覚する場合とでは、両者はかならずしもまったく同じ知覚だといえないのではないか。

後者の知覚では、たえず過去経験の想起（および、錯覚であることを意識している知性）によるなんらかの微妙な修正が加わる。ほとんど同じ知覚であっても、後者には、少なくとも独特な知覚を成立させた特殊な条件（手が熱くほてっていたり、冷たくかじかんでいる、とか、背景の雲が動いている等）についての了解があり、それゆえ、知覚現象からただちに、ぬるま湯を冷水とか熱湯と判断したり、月そのものが反対運動をしているのだと断定したりすることを避けるような力がはたらく。あくまでゲシュタルト心理学に忠実であろうとすれば、冷たい（または熱い）ぬるま湯の経験にせよ、動く月の経験にせよ、対象的世界にむけての人間の身体による「体制化」の結果として説明し、知性や過去経験の介入を極力しりぞけようとするかもしれない。しかし、現実生活の領域では、記憶ぬきの知覚、知的理解ぬきの知覚がほとんど存在しない以上、他者からの影響を完全に遮断してしまう「体制化」知覚理論は、かえって非科学的となるだろう。¹⁾

こうして、同じ対象についての知覚をとってみても、どれほど豊かな経験に支えられているか、

1) もっとも、公正を期せば、「柔軟な」ゲシュタルト心理学者は過去経験の影響を否定してはいないことを補足しておこう。G. カニツァは、その著『視覚における体制』の中で、ゲシュタルト心理学は「過去経験を普遍的な説明原理とは考えない」だけであって、その影響を否定したという批判は伝統的な誤解にすぎぬ、という。

どれほど鋭いすぐれた知性機能によって浸透されているかによって、諸知覚のうちにさまざまな段階・種類が区別されうることを、確認してよいように思われる。

2) 知覚によってとらえられる対象（個々の事物であれ、複合的な自然事象・社会事象であれ）の一つひとつの性質も一つひとつの側面も、すべて同格、すべて等価値であって、その真実性についての優劣はつけられぬ、という知覚相対主義の主張は、結局、知覚現象と対象の本質との間に越えがたい深淵をおくものだ。もっとも、相対主義者は知覚一元論者でもあり、存在するのは知覚現象だけであって、現象とは異なった「対象の本質」などはそもそもありえないのだ、と主張している。だから、その説は、現象と本質を峻別するというよりは、対象の本質なるものを認めず、本質への接近を避ける立場、現象の中を徘徊して、いつまでも本質に達しえない理論、といった方が正確かもしれない。なぜなら、じっさい、すでに見たように、長方形の机を目前におきながら、それが菱形にも台形にも見えるという理由で、机の形は決定しえない、と断言してしまうからだ。

では、この理論からすれば、対象は結局のところ何と規定されることになるのだろうか。対象の規定ということが、そもそも可能なのだろうか。たしかに、規定はされている。机上の本は、四角くもあり、黄色くもあり、かなり分厚くもあり、等々というように。前方に建っている家には、黒い屋根もあり、白い壁もあり、背後に頑丈なベランダもあり、前面には豪華な玄関もあり、等々というように。すなわち、各対象は、さまざまな「見え」「現われ」の、たえることなくそして終わりなくつづいていく系列として把握され表現される。本質はなく現象だけであるから、どの知覚的事実が対象をよく表わしているかは問題にならない。「主語 (S) は、ある述語 (P₁) でも (auch) あり、他の述語 (P₂) でも (auch) あり、また別の述語 (P₃) でも (auch) あり、……」と表現するほかはない。対象は、ただ知覚の連続的な無限系列 (P₁, P₂, P₃, ……) としてだけ存在する。その知覚的努力は、「もまた (auch)」の永久的な枚挙である。

フッサールやメルロ＝ポンティに代表される現代現象学の知覚理論も、それほどこの域を出てはいない。彼らによれば、固有の感性的身体をもつわれわれ人間は、かならず一つの視点から、ある特定の展望（パースペクティブ）のもとに対象を知覚する。身体をもたぬ絶対者のように、視点や展望のない、無条件的かつ普遍的な立場から知覚するのではない。しかも、彼らは、知覚にふくまれる多様で個性的な「主体にとっての対象の意味」に注目する。それゆえ、対象とは、特定のパースペクティブをそなえた、かぎりなく連続する知覚と意味の系列だ、ということになる。意識や身体から独立した自然的世界を想定することなど独断的だ、とみる反唯物論的な見地ともあいまって、彼らはたやすく知覚相対主義と結びつく。¹⁾

1) メルロ＝ポンティは、フッサールの精神を継承するかたちで、「記述することが問題であって、説明したり、分析したりすることは問題ではない」と述べている（『知覚の現象学』）が、対象を知覚と意味の系列に帰着させる立場からは、たしかに「純粹記述」という方法しか出てきようがない。彼は、もっぱら因果的な分析や説明をこととする科学の否認を強調するが、彼の論述の中に色濃くにじみ出ている、分析・総

対象を完結しない知覚の無限系列に帰着させるこの種の議論を、どのように打破したらよいか。少し反省してみればわかることだが、現実生活の領域では、われわれはめったにこんな考え方や議論をしていない。「机の上にある本の表紙の色は、他の本の色とどう違うか」と問うて、赤や白ではなく、ほかならぬ黄色だと確認する（もちろん、特別な光線の下ではなく、ふつうの自然光という条件下で）。「前方にある家は、隣りの家と同じようにベランダがあるかどうか」と問うて、事実ベランダと呼ぶにふさわしいものがそなわっていることを確認する。すなわち、ある一定の欲望や意図にしたがって、対象認識の範囲を設定しつつ、対象を知覚している。対象のただ一つの性状だけを問題にするのではないにしても、実践と認識の目的から要求されてくる、対象の限定された諸性状を把握することが眼目なのである。

上述の P_1 , P_2 , P_3 , ……の連続した系列は、主体の実践的要求にしたがって切断され、いくつかの P が必要に応じて選びとられている。これが可能なのは、まず特定の実践的要求があり、それにもとづいて特定の認識目的が成立しているからである。たとえば、友人から招待されて友人宅をはじめて訪問するとき、教えられた通りベランダのある白い壁の家を見つけねばならないとしよう。こういう必要に迫られて、目的地近くの家々にベランダがあるかないか、家の壁は赤や青ではなく白いかどうか、たいせつな認識目的となる。いうまでもなく、ここでは対象知覚の無限系列は無用である。対象のある限られた諸性状の知覚がありさえすればよい。

さらに、ある範囲内の同種の知覚的事実が次々に出現するとしても、それらをあいまいで未決定のままに放置してはならず、その中で何がもっともよく対象を示している事実であるかについて確定することが、無条件的に要求されているはずだ。実践的要求にしたがって、家の形は？、大きさは？、色は？、壁の材質は？、そして屋根の勾配は？、などという問いに決定的な答を出しうるし、出さねばならない。明確な答が求められているにもかかわらず、家の形、大きさ、色等々が、種々の条件下でさまざまに変容して見えるという理由で、いつまでも決定を保留してよいというわけではない。未決定状態に安住しようとする知覚相対主義は、現実生活からの切実な要求にたいしてあまりに無力であり、そして怠惰なのである。

ある事物がまったく観想の対象になっている場合には、たしかにその事物は知覚の無限系列に帰着しやすい。そこでは、認識目的がまったくないか、またはきわめて薄弱なために、対象認識の範囲を設定することが困難だからである。こうしてみると、現象主義から発する知覚相対主義が、事物の性状や本質を「見え」¹⁾に解消するのは、たえず唯物論や自然主義に背を向けようとする知覚至上主義であるからだが、同時に、対象全体を知覚の無限系列に帰してしまうのは、人間のリアルな生活要求に無関心なはなはだしい観想的性格が、それに深く浸透しているからなのである。

合や概念的・一般化・法則化を斥ける「記述」の態度は、狭義の経験科学だけでなく、学一般 (Wissenschaft überhaupt) の放棄につながりかねない、と私は考える。

1) 「見え」以外にも、同じ意味をもつさまざまな用語が氾濫している。「感覚与件」「現出」「立ち現われ」「現相」「射映」等々。